

大泉高校新聞

生徒総会報告

選管の規約改正承認

去る二月二十五日、昭和六十一年度最後の、定例生徒総会が行われた。今回は、会計報告と、選管の規約改正とに重きがおかれたが、その他は前回同様の、議事の進行がみられた。しかし、まだ私語が多く、執行側から再三注意を受ける場面もあった。

1会計報告	昭和六十一年度生徒会算定について
2委員会報告	各委員会委員長からの活動状況の報告。
3水泳同好会の、部への昇格について	ほぼ過半数をもって承認。
4選管の規約改正について	ほぼ過半数をもって承認。
5自由討論	前回生徒総会から企画された自由討論では、予算編成時における、種々の考慮点の在り方、委員長会の実施如何（執行から）、などについて話合われた。一般生徒からの話し合いの内容に対する反応も、多少なりともあったようである。

説 論 忘れしもの

先日、某先生のところに用足しにいったとき、一年生がその先生と教科書片手に何やら込み入った話をしていた。何とはなしに聞いていると、漸くにして話の内容が飲み込まれた。その内容とは、ズバリ「大学入試について」であった。

今年度の国立大学入試は、共通一次試験が五教科五科目となり、またかつての二期校制の再現とも言うべきA・Bグループ分け（あの、「東大と京大とが併願受験できる」といううたい文句付きの施行）により、前年度まで続いたこの数年間の低倍率・国立離れの現象を見事に覆した。しかし、その裏には、いわゆる「足切り」が潜んでいる。

大学側が決めた、共通一次試

このとどんどん入学試験は難解度を増し、ますます入学しにくくなってしまっている。

大学入試については、臨教

審（臨時教育審議会）や、草根としての教育を考える会などにおいて、いろいろと取

り沙汰されている。そのつど

様々な改革案が出ても、口先

ない。まさに、「論より証拠」、

卒業おめでとう

体験を大切に

学校長 圖子 岩雄先生

無財の財 教頭 川瀬 吉郎先生

大泉庭園の清掃 益田 恒彦先生

御子柴 栄一先生

沼田 英一先生

人間の詩 西山 三郎先生

牧野 茂先生

西山 三郎先生

道範士の晩年の作です。

詩を紹介します。ある故・剣

孫康が車胤を訪ねると、車胤

雪明かりで勉強したのが孫康

を見ていた。何をしてくるの

ときと、雪が降りそうもない

ので心配していたという。

がちなる人もいれば、何でも

順調に事が運ぶという人もあ

るようだ。この差はいittai

どこから生ずるのだろうか。

私は運命論ではない。人

の運・不運は生まれながらに

かかるといふことだ。

だから、安易な妥協などせ

ずに、自己を信じ、自己に忠

実に生きてほしい。それが目

のだから。

が、自分の血となり肉となる

のだから。

が、逆にわがまま無責任な

姿勢に失望を感じたことも

多少あったように思う。

学習面でも、また生活面で

も、諸君に自立と自律を求め

たが、全体的にその方向に進

んでくれたように思う。諸君

は人が良いが、あまりのが欠

点だから。

が、逆にわがまま無責任な

姿勢に失望を感じたことも

多少あったように思う。

が、自分の血となり肉となる

のだから。

が、逆にわがまま無責任な

姿勢に失望を感じたことも



「假名手本忠臣藏」



詩的SFへのススメ

生まれた架空の世界だった。私の出身高校には強歩大会という行事があった。晚秋のある日、男子は校庭を正午に出発、翌日の正午までの二十四時間、中央線・大糸線に沿って歩ける所まで歩こうという催しである。

一年の時は、伊勢湾台風の年。通過の翌朝、一年が入っている校舎は転倒しているはずであると勇んで登校した。「残念でしたね。昨年、古電柱で補強したんですよ。」元予科練の教官殿の先生は教室にあらわれるや開口一番のたもうた。いわれてよくみると何ヶ所にも太い丸太のつづかい棒がされていた。

翌日からは三日間授業中止で、農協のトラックに乗つて援農を行つたほどのすさまじい荒れようであった。道路も予定されたコースのあちこちが寸断されており、強歩大会は中止された。

二年生の強歩大会は私にとって待ち遠しいものであった。二学期に入ると体育はひたすら脚力養成である。その上本番前に、一万余、三万余のうちに

SFは空想科学小説とでも訳せばいいのだろうか。そのせいか記者自身も、また周りの友達も「SF」というと、未来物、宇宙戦争物を想像してきた。しかしここにその概念を崩した人がいる。

ここまで読んで、「新井素子を出すな」と思った人ははづれ!私が紹介したいのはレイ・ブラッドベリである。

彼はよく「SF界の抒情詩人」と評される。どうしてか、それを説明しよう。そもそもSFとは科学技術・テクノロジーの発達癡展に刺激されて生まれた架空の世界だった。

Fへのススメ

ばかばかしく感じたり、とまくちよつと次元の違う世界をのぞいている気になるだらう。だがブランドベリの作品を読むと、その設定はどんでもなく現代からかけ離れていても、どこか切ないほどに登場人物の生き方、感じ方に共感でき、その感覚をも実感できるのだ。

まあ春休みに御一読あれ！

次に記者が特に推せんするブランドベリ物を載せておく。

短編としては、「飛行貝」

「この地には虎数匹おれり」「雷のとどろくような声」「霧笛」「みずうみ」「壇」など。

それらが載っている短編集として「スは宇宙のス」「ウは宇宙船のウ」「10月はたそがれの国」が文庫本でている。

若者

品中には、かなりダイレクトに示されている。そんな事彼女の作品が、主に女子中生に支持されている理由なかもしれない。

最近の余り本を読まない子中学生でも、コバルト文の彼女の作品の一つくらい読んだ事があるのではない。それ位に読み易い文章だしトーリーも面白い。ただやり大きな原因は、先に述べ直接的な、テーマの掲示にると思う。

今さら、高校生の皆さん「人間」について考えて欲しいなどと書くのも馬鹿らしくかもしれないが、実際日々そんな事を考えない人にとては、案外彼女の小説は「人間」かもしれない。あまりも直接的で、また、それ故

こそ、なまじっかな小説よりも、印象が強烈なのだ。
中学生などは、その印象が強すぎて、それを全てそのまま自分の心に、自分の考え方としてとり込んでしまいがちだが、その点、皆さんは高校生だし、強い印象も多少の反感と自論の抵抗でもって受けとめて、心の内でゆっくり消化して後に、自分なりの考え方としてとり込むことができると思うのだ。だから記者は、彼女の作品を、今、高校生の皆さんに、読んで欲しいと思うのである。

記者は、本を読むという事を、思考することだと思っている。娯楽小説を除けば、書物というものは、自分の思考をスタートさせるためのきっかけなのだと。今の時代、私

達は本当にじっくり事を考えなければならないと思う。別に新井素子にこだわらなくとも良いが、先に述べた二つの相反する想い、またそれについての思考というものはこれから時代に私達に要求されてくるものだと記者は思う。

青春雜感
井上昭



団の一人はどこまで行くつもりか知らないが団旗を持つてゆうゆうと歩いている。確かに、OBも一般の人も参加できたようで、我々の時も七十くらいのご老人が二本の杖を持って参加していた。噂では大部分の男子生徒が毎年この一見弱々しい爺様に連れをとるということであった。しかしその姿を眼前にして信じられず、遅れまいと心する。

が下君と私の目標であった。
深夜、その諷説にたどり着いた。疲れて冷えた身体には、焚火と温い汁が無上にありがたい。腰をおろすと眠り込もうとなる。眠つたら再び歩けないと教えられているので、やっとのものいで立ちあがめ歩きはじめた。検問所は国鉄の駅毎にあるので、岡山、川岸、信濃川島、小野、塩尻、

上り勾配の上の方の暗闇
なかに赤い焚火が見え、一
人の人影がつかぶ。あそこが
だと元気を出す。登り切る
なんと元予科練の教官殿で
る。まあ少しあたっていけ
いわれ、検査をもらい、通
者の情報を得る。ここまで
たのなら、松本まで頑張れ
激励をうける。しかし自信
ないなら先は長くて一番つ
つはがみり川鉄道の
訪連運連教高の
黙々と歩く、やがて平坦
舗装道路に出る。夜も明けり
休んで行くといって残る。
で二・三名しか行きつけな
といわれていた松本。まだ
明け前だ。寒いし、足は棒
ようで、マメだらけだが丁
と相談の上、歩き続けるこ
にする。もう一人はしばら

じめたのか青紫色の空も明さを増してくる。道路は真ぐである。あの先にたたずむ街が松本であろうか。

太陽が出た。冷え寂れたに陽の温もりがありがたく、幾分元気が出て、少々ピッカ上ったようだ。これぞお様だ。ひたすら歩く、しかし目の前の真直ぐな道は短くならない。眠気ももどつてきま平素はいたって仲の良いＴであるが互いに口もきかなない。眼鏡ももどつてきまことに口を開くと、つづけどんな返事しか互いにしな怒ったような顔をして歩くみは遅い。長い長い真直ぐ道であった。街並みのなかに入つても松本の検問所にはかなつかない。足は靴のかでヌルヌルしている。

へたりこむようにして検所へたどりついた。友はすりこんで首を下げ、左右にすっている。

すわりこみ、足を点検すと幾つかあったマメが合併して、指の根元、かかとの二所に、生まれてはじめてみ巨大なマメになつていた。

直る む 体 、 日 朝 し な い た く な う な ま た 足 を ひ た す ら 交 互 に 前 に 出 す。 独 行 な の で 道 を 誤 ら な い か と の 不 安 が あ る。 速 い の か 迟 い の か の 感 覚 が な い。 時 計 を のぞ き こ み 残 り 時 間 を 確 認 し な が ら、 ひ た す ら 歩 く。 次 の 檜 間 所 で 私 の クラス で は、 一 人 が 先 行 し て い る こ と を 知 る。 更 に 欲 張 り、 十一 時 頃 桧 橋 に 着 く。 通 行 証 に 記 さ れ て い た 步 行 距 離 は 二 二 七 キ ロ。

三 年 の 時 は、 更 に 遠 く へ と 出 発 し た の だ が や は り、 桧 橋 止 ま り、 こ れ が 私 の 限 領 で あ つ た。 桧 橋 で い た だ い た 信 州 の 青 梅 の 砂 糖 渣 汁。 あ の コ リ コ リ し た 味 わい が な つ か し く、 今 だ に 梅 の 季 节 に は 挑 戰 す る が 成 功 し て い な い。

翌 日、 平 常 通 り 登 校、 皆 ガ 二 股 で ニ コ ニ コ し な が ら や つ て く る。 昭 和 三〇 年 代 後 半 の 高 校 生 の 姿 で あ つ た。

はお許しを。こちらも「口一日、予定とにらめっこなのです。

若者の文明論

品中には、かなりダイレクトに示されている。そんな事

ト
が
こそ、なまじっかな小説よりも、印象が強烈なのだ。

達は本当にじっくり事を考え
なければならぬと思う。別